

＊【投稿要旨】

【資料】

『道竿拾躰』

解説 仙台藩茶道石州流清水派宗家

(故) 十世 大泉道鑑

十一世 大泉道鑑

校閲 岩手大学名誉教授 細井 計

千利休の高弟山上宗二の茶道伝書『山上宗二記』には「茶湯者覚悟拾躰」及びその追加「茶湯者又拾躰」がともに記載されている。それによると、茶湯者とは茶の宗匠のことで、目利きであること、茶湯に優れていること、師匠をしていることをいうが、これらの条件のほかに「茶湯者覚悟拾躰」及び「茶湯者又拾躰」が必要であるとしている(桑田忠親著『茶道辞典』)。「道竿拾躰」は、仙台藩茶道茶道頭三世清水道竿がこの「茶湯者又拾躰」の写しにさらに「私註」として道竿の考えを大幅に書き加えたものである。「道竿拾躰」に記載されている十ヶ条は次の通りである(『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』)。

又十躰之事 一、目利 一、手前ハ薄茶力專也 一、困爐裏風炉の炭之事

一、所作花生様 一、風爐小板釜直二居ル様同困炉裏之内釜の釣様其外手ニ

而仕程之所作之事 一、會席之事 一、客人振りの事 一、教寄雑談之事

一、茶湯ハ習骨法普法度第一教寄仕様ト云事有 一、茶湯の師匠ニ別而後迄ニ

用ル覚悟一切之上佛法歌道并二能舞刀嚙又下々の所作迄モ名人の仕事ヲ茶湯

ト目利ト二ヶ條の**手本**ニ取也

筆者らは、この『道竿拾躰』を解説し、読者の理解の便を考慮して、旁註を付け、更に註釈を文末にまとめたものである。

この詳細は、『茶の湯文化学』二十八号を参照ください。

